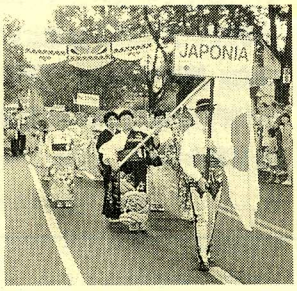
Hot Line

清和洋子（姫路獨協大学教授）

昨年、ポーランド南部山岳地方、スロバキアとの国境の町ザコパネで毎年開催されている「国際山岳地方民謡祭」に、私たち比較舞踊学会の有志が参加しました。ザコパネはポーランドきってのリゾート地で、30年前に初めてここを訪れたときは、その美しい景観に感動した私でした。北側のスロバキア国境付近は切り立つ山肌が連なり、南側は奈良の若草山のようになだらかな山々です。

この「国際山岳地方民謡祭」は27回目になります。大会事務局の要請で、参加者は舞台で演じる前日から民族衣装を着て所定の教会に集合とのこと。私たちは着物を着て教会のミサに参加したり、ザコパネの街をパレードしたりしました。日本からは初参加。フランス、イタリア、スペインなど十数カ国が参加しました。（姫路市在住）



楠本康子（養護学校教諭）

平成９年の大阪国体から成年女子の剣道がやっと競技種目に加えられる予定です。女子剣道の歴史は確かに浅いのですが、競技人口はかなりありますし、遅すぎるなあと思います。しかし何はともあれ前進したことであり、うれしいことです。

先日６段に合格しました。剣道の審査は性別にかかわらず生年月日の近い者同士で行われるので、女性だからといって配慮されません。だからこそ私個人にとっては価値ある６段ですが、女性や剣道界全体を考えると功罪あるシステムといえるでしょう。

今、この職場に勤務するようになって感じたことは、女性よりも障害をもつ人の観点からみたスポーツの現状の厳しさです。行政等ではさまざまな工夫がされていても、企業や本人たちの自発的な盛り上がりが今ひとつの感があります。スポーツに親しむというより“生きる”という根幹にかかわるところをまず問題にしなければならないのではないかという気がします。そんなところから“変わらなきゃ”と思います。（大阪市在住）

桂千恵子（大阪国体局）

「ゆとりと豊かさ」を実感できる生涯スポーツ社会づくりを目指して、「なみはや国体」（1997年大阪）の開催準備を進めています。

昨年７月には、ベルリンで開催された「世界体操祭」に大阪から参加したグループ「WGLA」に同行しました。健康に役立つばかりでなく豊かなコミュニティーづくりに貢献している輝く女性の多いこと！改めてエネルギッシュな女性のパワーに感動しました。

しかし一方、大阪府競技団体、府市町村（行政）の役職者には女性がわずか５％（このうち、なぎなた、家庭婦人バレーボールなど女性のみの競技団体は当然代表は女性）。なみはや国体から剣道の成年女子の監督16人が増となるが、いろんな競技において監督、コーチ、審判にも多くの女性の活躍を望んでいます。（女子マラソンでもコーチは男性ばかり？！）　国体を契機にスポーツ選手を支援してくださる女性の婦人科医やスポーツドクター、種々のスポーツに携わる方々のネットワークを広げる一助となればと思っています。（茨木市在住）

山崎恵司（共同通信　前ニューヨーク総局記者）

米国では女子プロバスケットボールリーグを創設する計画が進んでいます。今年夏のアトランタ五輪で金メダルをつかみ、その勢いでプロ化をしようという

ものです。中核になるのは五輪代表チーム。すでに９人が新リーグでのプレーに合意しています。その中には、日本でプレーした経験を持つ選手２人（テレサ・エドワーズ、ケイティ・ステディング）も含まれています。これまで女子のプロスポーツといえばテニスやゴルフ、フィギュアスケートなどの個人競技しかありませんでした。過去にも野球など女子のプロリーグは存在しましたが、成功せず短期間で消滅しています。NBA や米国バスケット協会が後押しする今回はどうなるでしょうか。興行的に成功すれば、女子スポーツとしては画期的なことです。

３年間のニューヨーク勤務を終え、３月22日に帰国しました。米国のWSF の行事では米国女性の自己主張の強さ、パワフルでエネルギッシュに闘う姿勢を見ました。バックグラウンドが違うので、そのまま日本女性にあてはめることはできませんが、帰国後、機会があったら見聞きしたものを還元していきたいと思います。（東京都在住）

鈴木裕美子（自転車競技選手）

初めて寄稿させていただき、大変うれしく思っています。実際の話、WSF ジャパンという団体、組織がどのようなものか分らないというのが本当のところですが、自分の属している自転車競技界の中にいて日々困難と不満を感じている私は、藁をも掴むような思いがあってか、「ここだな」と感じ、ご一緒させていただくことにしました。

アトランタ五輪の選手選考方法についてなど、まったく腑に落ちない事柄が満ちている自転車競技界ですが、今ここで具体的な不満をぶちまけることは控えましょう。

先日、WSF ジャパンの昼食会があり、私も参加しました。集まった方々はもちろん女性中心でしたが、多くの競技種目に関係する方々でした。今まで、自転車競技という種目の中の会合には参加してきましたが、WSF ジャパンのようにスポーツ全体から横断的に人を集め、考えさせてくれるような組織の会合は初めてだったので、なかなか楽しく時間を過ごしました。私は選手なので、もちろん大事なのは自転車競技をすることであり、自転車競技界は私にとってかけがえのないものです。選手たちが幸せな環境のもとに競技ができさえすれば、あとはどうでもいいと言えないこともないのですが、15年間選手としてそんな気持ちですごしてきた結果が、今の自転車競技界の姿です。前回のバルセロナ五輪に参加でき、TOL(Total Olympic Ladies＝五輪に出場した女子選手の団体）のメンバーとなり、WSF ジャパンを知ったわけですが、一つの競技種目の中で鬱々としていたのでは、何もよくならないということが分かったような気がします。

他種目の方々に相談に乗っていただいたり、意見を交換したり、助けていただいたり、わが競技界を第三者の立場から監視していただいたりしながら、女性という共通の立場で集まれる「場」があるということは大事なことではないでしょうか。自転車競技選手として皆様と共に活動していくなかで、わが競技を見つめ直し、改善していく方法などを見いだしていけるような気がします。（東京都在住）

加藤妃生子（日本レクリエーション卓球連盟代表）

１月１日より、日本家庭婦人卓球連盟は日本レクリエーション卓球連盟と名称を変更しました。

お陰様をもちまして、連盟も創立以来16年を迎えました。社会のニーズに応えて参りましたが、近年、社会の変革は著しく、時代とともに連盟も転換期に入りました。生涯スポーツの理念はスポーツをレクリエーションとして生活に浸透させ、健康で豊かな生涯を目指し、男女平等の精神に基づき、幼い子どもから老齢者までが、ゆとりのある生活をするために努力していかなければならないと思います。（川崎市在住）